

## TEGによる人格特性と高校生の登校行動

田山 淳\*・田多英興\*\*

### The Relationship Between Attendance Performances and the Personality Traits Measured by Egogram (TEG) in High School Students

Jun TAYAMA\* and Hideoki TADA\*\*

In school age children, the decrement of school attendance rates is assumed to be a sign of some kinds of maladjusted behaviors and is conceived of one of the most serious social problems. In order to improve their attendance rates or how to intervene in this problem, the relationship to the personality traits as measured by a Egogram test was examined. The TEG (Tokyo University Egogram) test was administered to 231 high school students (121 males and 110 females) and investigated their attendance rates in terms of absenteeism, punctuality and early departure from school. Significant negative correlation of the “absence” factor was shown between Nurturing Parent (NP:  $r=-0.32$ ,  $p<0.0001$ ), Free Child (FC:  $r=-0.19$ ,  $p<0.01$ ), and Adapted Child (AC:  $r=-0.16$ ,  $p<0.05$ ) scores, respectively. A multiple linear regression analysis including all of the TEG scales and sex of the subjects, revealed that the NP ( $\beta=-0.25$ ,  $p<0.001$ ) and AC ( $\beta=-0.20$ ,  $p<0.01$ ) factors were independently associated with higher absenteeism, which suggested that the low scores of NP and AC factors might anticipate a high probability of absenteeism in a high school student.

Keywords: TEG (Tokyo University Egogram), School Attendance Rates, Absenteeism, Punctuality, Early Departure

---

\* 東北労災病院勤労者予防医療センター

\*\* 東北学院大学教養学部教授

## I はじめに

従来のbiology（生物学）を基盤に発展してきた医学一般モデルにおいては、病気や疾患のみならず、その発症や治癒に関しても生物学的因子に全てが規定されると捉える。しかし、例えばアトピー性皮膚炎や過敏性腸症候群などのように、生物学的な直線的因果律だけでは十分な説明ができない病態もあり、近年は心理的要因や社会環境要因が発症や治癒に関与している側面を強調する傾向が医学全般に強まっている。つまり、生物・社会・心理の各因子を包括して捉え、アセスメントや治療を行う立場、所謂bio-psycho-social model (Engel, 1977) のパラダイムが提唱されてきて、そのパラダイムによる基礎的研究も増加し (Sagami et al., 2004; Bradbury et al., 1998)、実践及び介入に有用なevidenceも集積されてきている。例えば、生活習慣病の患者の心理的な側面に関する研究 (Munakata et al., 1999) やソーシャルサポートの有効性を実証した研究 (Sweeney et al., 1984) 等がその例であり、その結果、生物・社会・心理の観点からパッケージ化されたサービスの提供も可能になってきている (宗像, 2005)。このように、複数の視点から統合的に人を捉えることは、アセスメントや治療において非常に重要な意味をなすことが認識されるようになった。

一方、教育現場においても、evidence basedな視点から行われている教育的介入がある。例えば、武蔵ら (2003) は、グループ・エンカウンターの効果検証を行い、その実践的な有効性を報告している。また、いじめの問題に関して、本間 (2003) は、いじめの加害者への有効な対応を検討している。このような教育実践に即したevidenceの蓄積は必要不可欠であろう。さらに、生徒ではなく教師側の問題として、その仕

事量の多さ等に起因したストレスから、バーンアウトに至る教師が少なくない (高木・田中, 2003)。evidenceに基づいた教育実践及びその研究は、教育現場のスタッフへの負担軽減の点やCost Performanceの点を鑑みても必然といえよう。また、bio-psycho-social modelのように、教育事象を複数の視座から捉えることで得られたevidenceは、教育実践で有用であることが推測される。しかしながら、複数の因子を包括したevidenceとそれを利用した実践は医療現場に比し教育現場ではまだまだ乏しい。実際のところ、教師は生徒の日常的な行動レベルの観察は可能であるが、その行動背景である心理を知る方法と時間はあまりないというのが現状だからである。

また、心理学では古くから個人差の解明のために、personalityについての研究が盛んに行われている。例えば、Friedman と Rosenmanがかつて心疾患との連関を明らかにした所謂Type A研究は(Friedman & Rosenman, 1959)、現在では脳及び心血管イベント発症の予防に役立っている。また、自己分析のツールとしてDusayにより考案されたエゴグラムは、その後、交流分析 (Transactional Analysis)として展開され広い分野で活用されている。本邦における代表的なエゴグラムの1つに東大式エゴグラム (TEG) があるが、その客観性や利便性の高さから臨床的にも幅広く利用されている。しかし、ある特定の集団を対象として、その疾患や行動の背景にある因子をTEGにより客観的に同定する試みは少ない。このような現状の中で、Nakaoら (1999) は、摂食障害患者をAnorexia Nervosa群とBulimia Nervosa群に分け、各疾患群に特異なTEGの下位因子を同定し、介入の道筋を示している。このような、personalityとある疾患や行

動を結びつける研究、いわばpsycho-behavioralな連関の解明は、介入や治療に有用なevidenceをもたらすひとつの有力な方法と考えられる。そのことは、認知行動療法の発展を見ても明らかである。従って、客観性や利便性があり、且つ、臨床的に実用度の高いTEGを用いてpsycho-behavioralな連関のevidenceを得ることは、実践的な介入においても重要であると考えられる。

本研究では、上記までのこと等を受け、教育現場における生徒の一般的な行動から“登校”というトピックを取り上げた。学生の“登校”という事象は、社会人に置き換えると勤務状況であり、人事考課とも直結した社会人として個々に考慮しなければならない重要事項である。高校生においても、出欠、遅刻、早退は義務教育と比較して重要な意味を持つ。高校の中途退学者は平成5年以降増加傾向にある。しかし、生徒が退学に至る経緯のより初期の段階には、多くのケースで登校状況の悪化がみられる。義務教育では不登校の問題が近年大きな問題になっているが、高校においても、長期欠席者は多く、その対策や学校ごとの様々な取組がここ数年でなされてきた。しかしながら、顕著な改善はなく、むしろ悪化しているというのが現状である。ある種のストレスによるストレス反応として登校状況が悪化することには疑いの余地はないであろう。また、ストレスに曝される個人のpersonalityも登校状況の悪化に関与することも予想するに易い。しかし、どのようなpersonalityが登校状況と関連するのか、客観性と利便性を兼ねたTEGに関してですらそのevidenceは皆無である。臨床的に実用度の高いTEGと生徒の登校状況に関するevidenceを得ることは、教育現場における実践的介入において非常に重要であると考えられる。また、その

evidenceの確保により、不登校や欠席の多い生徒に対する介入の糸口を提出できる可能性もある。

## II 目的

本研究では、高校生の欠席、遅刻、早退という行動評価が、TEGの下位因子といかなる関連があるか、あるとすればどのようなメカニズムになっているのかを検討することを目的とした。従って、登校状況にはTEGのいずれかの下位因子が関連する、という仮説の検証を行った。

## III 方法

**対象：**対象は宮城県内の某全日制高校における1年生、総数231名（男子121名、女子110名）である。調査対象校は、宮城県の都市部に位置し、卒業生の多くが大学に進学する、いわば進学校である。勉強だけでなく、部活動も盛んで、生徒全員に部活動への入部が義務づけられている。なお、調査と合わせて対象者個々への結果のフィードバックと集計結果を利用した研修会を開催したが、教育的アプローチの有効性を鑑み、対象を一年生のみとした。

**調査方法：**調査に先立ち、研究目的及び調査で得られた情報の利用方法について学校長に説明し同意を得た。生徒、保護者に対しても同様の内容を紙面により説明し同意を得た。生徒、保護者の同意に関しては、異議・意見を求めると共に、調査への協力は強制ではないことを伝えた。2004年5月、東大式エゴグラム（TEG（高校向））を用いて記名式のアンケート調査を行った。TEGの実施前、教育相談部スタッフにより、各クラス担任はTEG実施マニュアル（東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2002）を一読すること、マニュアルに従って調査を実施する

旨を指示された。TEGの実施の際、各クラス担任はTEGの結果が成績及び評価に関係ないことを対象生徒に強調して伝え、その後、学級を単位とする集団法によりTEGを実施した。5つの自我状態の因子であるCritical Parents、Nurturing Parents、Adult、Free Child、Adapted Child（以下、CP、NP、A、FC、AC）が点数化された。登校状況に関しては、2004年6月末までのデータを生徒指導部のスタッフが欠席、遅刻、早退別に集計した。TEG及び、集計された登校状況のデータは、プライバシー及び倫理的な配慮から、教育相談部のスタッフにより取りまとめられ、部外秘扱いとされた。このデータから名前の欄をマスクしたデータが教育相談部により用意され、これを統計解析に用いた。

**分析方法：**TEGの各因子の平均と標準偏差を算出した。登校状況に関しては、欠席、遅刻、早退それぞれの回数を実際の登校しなければならない日数で除して、そのパーセンテージを求め、それぞれの率の平均と標準偏差を算出した。また、各変数間の単相関分析を行った。さらに、登校状況を目的変数とした重回帰分析を行った。相関分析と重回帰分析において、性別にダミー変数を当てはめ、男子を‘1’女子を‘2’として分析を行った。

#### IV 結果

調査対象全体のTEGパターンの特徴は、NPが頂点をなし、かつFCも高いM字型であったことである。TEGの各因子に関して、先ず性差を検討するためにt検定を施したところ、FCのみで男女差が見られ、女子が有意に高い得点を示した ( $t=-2.05, p<0.05$ : 表1)。

登校状況に関しては、男子の遅刻率のみが1%を若干上回ったが、男女共に他の登校状況

表1 エゴグラムの各因子及び登校状況の平均と標準偏差

	男子 (n=121)	女子 (n=110)	p値
CP	9.1±4.3	9.9±3.7	ns
NP	12.4±4.6	13.4±4.8	ns
A	9.8±4.2	9.2±4.6	ns
FC	12.2±4.6	13.5±4.4	0.05
AC	10.8±4.7	10.4±4.9	ns
欠席%	0.9±3.2	0.5±1.4	ns
遅刻%	1.2±5.2	0.4±1.6	ns
早退%	0.3±0.9	0.1±0.5	ns

は1%未満であった。登校状況の欠席、遅刻、早退の3得点について性差をt検定で検討したところ、いずれにも男女間で有意差は見られなかった。

TEGの5つの変数と登校状況に関する3つの変数間の関係を検討するために、各変数間の単相関分析を行ったが、以下が相関の結果の概要である(表2)。: 1) 欠席では、遅刻 ( $r=0.52, p<0.0001$ )、早退 ( $r=0.46, p<0.0001$ ) と有意な正の相関を示し、TEGのNP ( $r=-0.32, p<0.0001$ )、FC ( $r=-0.19, p<0.01$ )、AC ( $r=-0.16, p<0.05$ ) との間に有意な負の相関を示した。2) 遅刻では、早退 ( $r=0.29, p<0.0001$ ) と有意な正の相関を示すと共に、TEGのNP ( $r=-0.16, p<0.05$ ) と有意な負の相関を示した。3) 早退は性別 ( $r=-0.13, p<0.10$ ) と有意な負の相関傾向を示した。登校状況不良の者は対象全数のうちごく少数に限定されるが、その限定された者が欠席・遅刻・早退を重複することが分かった。

登校状況を示す欠席・遅刻・早退の3つの変数を決定する貢献因子を推定するために、欠席・遅刻・早退の各変数を目的変数とした重回帰分析をおこなった。その結果、欠席状況では、

表2 各変数間の単相関分析の結果

	欠席%	遅刻%	早退%	性別	CP	NP	A	FC
遅刻%	0.52 ***							
早退%	0.46 ***	0.29 ***						
性別	-0.07	-0.11	-0.13 †					
CP	-0.11	-0.09	-0.04	0.10				
NP	-0.32 ***	-0.16 *	-0.06	0.11 †	0.14 *			
A	0.03	-0.01	0.11	-0.07	0.53 ***	0.04		
FC	-0.19 **	-0.07	-0.09	0.13 †	0.35 ***	0.47 ***	0.10	
AC	-0.16 *	-0.09	-0.06	-0.06	-0.30 ***	0.06	-0.19 **	-0.26 ***

\*\*\*p<0.0001, \*\*p<0.01, \*p<0.05, †p<0.10

TEGのNP ( $\beta=-0.25, p<0.001$ )、AC ( $\beta=-0.20, p<0.01$ ) が欠席の有意な説明変数になった (表3)。遅刻に関しては、説明変数の当てはまりが悪かったが、NP ( $\beta=-0.13, p<0.10$ ) の弱い関与が認められた (表4)。早退に関しても、当てはまりが悪かったものの、A ( $\beta=-0.14, p<0.10$ ) との弱い関与が認められた (表5)。

表3 欠席を目的変数とした重回帰分析

	$\beta$	P value
性別	-0.02	ns
CP	-0.15	ns
NP	-0.25	0.0006
A	-0.08	ns
FC	-0.08	ns
AC	-0.20	0.0039

F=6.396, R<sup>2</sup>=0.147, p<0.0001

表4 遅刻を目的変数とした重回帰分析

	$\beta$	P value
性別	-0.08	ns
CP	-0.11	ns
NP	-0.13	0.0833
A	0.02	ns
FC	0.01	ns
AC	-0.11	ns

F=1.923, R<sup>2</sup>=0.049, p<0.0782

表5 早退を目的変数とした重回帰分析

	$\beta$	P value
性別	-0.10	ns
CP	-0.10	ns
NP	-0.01	ns
A	-0.14	0.0704
FC	-0.08	ns
AC	-0.08	ns

F=1.683, R<sup>2</sup>=0.043, p<0.1262

## V 考察

一般的に、NPを頂点としたなだらかな“へ”の字型”が自他肯定を示す健康なエゴグラムタイプとされている。TEGの標準化の際に得られ

たデータにおいても、その分布は男女共に“へ”の字型”を示す (東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2002)。ところが、本調査対象校におい

ては、NPを最高点としたNP優位型であったが、FCも同様に高く、さらにAが低かった。高FCと低Aは、東京大学医学部心療内科TEG研究会(2002)が行った調査と比しても顕著であり、本調査校の特徴であるといえる。従って、エゴグラムは明朗楽天性等と言われる“M字型”を描いた。NPは、思いやりがあり、共感的で、寛容する母親的自我を示す。また、FCの高さは、自由な自己表現等を意味し、Aの低さは分析的で科学的な視点の欠如を意味する。白鳥(2000)は看護系の大学生と短大生を対象にTEGの比較を行い、大学生の方が短大生に比べ高Aで低FCであることを示し、これが教育課程等の影響であることを示唆している。本研究の対象は高校生であり、大学生らと比べて教育レベルが低いばかりでなく社会的な経験や対人的な経験も少ない。このような事情が、調査対象校では高FCと低Aを示した背景と考えられる。さらに、エゴグラムの相対的バランスにおいて、AよりもACの得点が男女共に高くなっている。この点から、自我の未発達故の他者からの影響の受けやすさや過剰適応なども窺わせる。すなわち、調査対象校のTEGから、「思いやりがあり自由に自己表現できるが、冷静に現実を検討できるという点では未発達である」という生徒像が浮かび上がった。また、FCが男子よりも女子が高かった点に関しては、一般的な傾向と一致する(東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2002)。

相関行列から、登校状況に関して、対象全数のうちごく少数が欠席・遅刻・早退を重複することがわかった。また、TEGと登校状況について、欠席と遅刻の多さは共にNPの低さと関連を示したが、相関は特に欠席で強かった。すなわち、他人に対する“思いやり”や“共感性”

が欠如していることと、欠席率の高さに関連があると考えられる。さらに、欠席とFC、ACも負の相関関係を示した。FCが低いことは、“自由な表現”ができないことを意味し、また、ACが低いことは、“順応性”に乏しいことを意味する。このようにNPの低さだけでなく、FC、ACの低さも欠席率の高さと関連した。さらに、欠席が多い対象は、遅刻や早退も多く、欠席・遅刻・早退という行動の共通項として時間的なルーズさや決まり事を守れないといった基本的な生活能力の低さがうかがえた。

登校状況とTEGの下位因子間の因果関係を明らかにするために行われた重回帰分析では、遅刻、早退は信頼係数が低かったが、欠席ではNP、ACの関与が認められた。相関行列から、欠席にはNP、FC、ACの3因子の関与が考えられたが、FCは欠席の有意な説明変数とはならなかった。つまり、NP、ACいずれも独立して値が低い場合に欠席率を高めた。

NPの低さは、思いやりのなさ、あるいは、非共感的な態度等、対人関係におけるネガティブな交流を示す。そして、ACの低さは、順応性の乏しさと共に攻撃的であることや反抗的であることを示す。従って、欠席のリスクとして考えられるpersonality像は、「思いやりがなく非共感的で、順応性に欠け、時に攻撃的である」といった像になるといえる。

さらに、エゴグラムの典型的なパターンとして、CP、FCの高さとNP、ACの低さを特徴とした逆N字型と呼ばれるエゴグラムがある。本調査において、欠席のリスクになった低NPと低ACは、逆N字型と呼ばれるパターンとの共通項である。これは、交流分析でいう他者否定パターン、所謂“You're not OK”という他人に否定的な交流パターンである。従って、高校生

における欠席のリスクとなる主要因として、他者に対して否定的である、という心理及び行動が関与する可能性がある。

では、心理及び行動的に他者に対して否定的であることがなぜ欠席につながるのだろうか。これに関しては、本研究結果からだけでは解釈は難しい。しかし、アサーショントレーニングにおける指摘が参考になる(平木, 2004)。このトレーニングにおいては、攻撃的なコミュニケーションを良好な対人関係を構築できないネガティブなコミュニケーションとして位置づけている。攻撃的なコミュニケーションにより、他者が不快感を示すことになれば、それはまた他者からのストレス源として自らにフィードバックする可能性がある。対人関係が不良であれば、所属するクラス内での満足度も他者と比べて低く、また、ストレスも高いことが想定される。それ故、観察可能な行動レベルのストレス反応として欠席が増加するのかもしれない。

以上の結果を全体的に勘案すると、当面以下2つの介入が考えられる。一つは、現状で欠席が多く、かつ、低NP、ACを示す者に対する心理的な介入である。具体的には、教育的な、所謂“指導”と合わせて、エゴグラムをツールとした社会的成長を促すスタンスでの心理的な介入が有効であるかもしれない。なお、現在不登校問題が深刻化しているが、欠席も長期化してしまうと学校への復帰が遅れることや、復帰できなくなることがしばしばある。このような現状からも、長期欠席の予防が重要だと考えられる。従って、二つ目としては、長期欠席や不登校を防止するための、予防的かつ教育的な介入である。具体的には、集団あるいは個人いずれかに対して、低NP、ACが欠席のリスクになること、そして欠席をしないためには低NP、AC

を改善する必要があること等の教授である。

TEGは医療や教育の現場では非常に多く利用されている。しかし、先にも述べた通り、TEGに関する教育現場における科学的研究が少ないため、十分に活用されているとはいえない。例えば、摂食障害の患者のTEGが高ACを示すとの報告(Nakao et al., 1999)、行動との関連を示すevidenceとして、薬剤師における調剤のエラー頻度の高さと、TEGの低Aと高ACが関連するとの報告(有田, 2003)、さらには、禁煙指導において、禁煙達成者の低ACを明らかにした研究(望月, 2004)等がある。これらの研究で得られたevidenceは、いずれも社会的に有用なばかりではなく、教育や指導にも活用できるものである。今後この種の蓄積が肝要となる。本研究はこの試みの一つの成果である。本研究では、教育現場における健全な高校生の登校という行動と、それと連関するTEGを示した。本研究の限界、問題として、対象校が1校1学年のみであったこと、進学校であったこと、宮城県の高校生に限定されたことなどがあげられる。これらの点を是正するためには、以後さらなる調査が必要である。しかしながら、本研究において、高校生の登校状況とTEGの関連についての一つのevidenceが得られたといえよう。

## VI 結論

高校生の登校状況という問題場面とTEGで捉えた人格特性との関係を検討した結果、TEGのNPとACの低い得点が高校生における欠席のリスクになる可能性が示唆された。

## <引用文献>

1. 有田悦子, 細谷未佳, 谷古宇秀, 加賀谷肇, 河合典子, 近藤芳子. 薬剤師における調剤エラー要

- 因と行動特性の関連. 薬学雑誌 123: 357-364, 2003.
2. Bradbury MJ, Dement WC, Edgar DM. Effects of adrenalectomy and subsequent corticosterone replacement on rat sleep state and EEG power spectra. *Am J Physiol* 275: R555-565, 1998.
  3. Engle GL. The need for a new medical model: A challenge for biomedicine. *Science* 196: 129-135, 1977.
  4. Friedman M, Rosenman RH. Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings; blood cholesterol level, blood clotting time, incidence of arcus senilis, and clinical coronary artery disease. *J Am Med Assoc* 169: 1286-96, 1959.
  5. 平木典子編 現代のエスプリ: アサーション・トレーニング. 至文堂 2004.
  6. 本間友巳. 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応. *教育心理学研究* 51: 390-400, 2003.
  7. 望月眞弓, 初谷真吹, 六西條恵美子, 有田悦子, 橋口正行, 清水直容, 竹内正弘, 山本信夫 秋葉保次. ニコレットによる禁煙達成に及ぼす保険薬局薬剤師の禁煙指導の有効性に関するランダム化群間比較調査研究. *薬学雑誌* 124: 989-995, 2004.
  8. Munakata M, Hiraizumi T, Nunokawa T, Ito N, Taguchi F, Yamauchi Y, Yoshinaga K. Type A behavior is associated with an increased risk of left ventricular hypertrophy in male patients with essential hypertension. *J Hypertens* 17: 115-120, 1999.
  9. 宗像正徳. ストレス性高血圧の管理と生活・栄養指導. *臨床栄養* 107: 713-716, 2005.
  10. 武蔵由佳, 河村茂雄. 大学生における親和動機の下位動機の階層性の検討: 発達を促進するための構造的グループ・エンカウンターを活用した援助のあり方. *カウンセリング研究* 36: 10-19, 2003.
  11. Nakao M, Kumano H, Nomura S, Kuboki T, Murata K. Assessment of ego state in anorexia nervosa and bulimia nervosa. *Acta Psychiatrica Scand* 99: 385-387, 1999.
  12. Sagami Y, Shimada Y, Tayama J, Nomura T, Satake M, Endo Y, Shoji T, Karahashi K, Hongo M, Fukudo S. Effect of a corticotropin releasing hormone receptor antagonist on colonic sensory and motor function in patients with irritable bowel syndrome. *Gut* 53: 958-64, 2004.
  13. 白鳥さつき. 基礎看護実習前の看護学生の自我状態についての考察: 大学生と短気大学生のエゴグラム調査の比較から. *山梨医大紀要* 17: 38-41, 2000.
  14. Sweeney JA, Van Bulow B, Shear MK, Freedan R, Plowe C. Compliance and outcome of patients accompanied by relatives to evaluations. *Hosp Community Psychiatry*. 32: 1037-1038, 1984.
  15. 高木亮, 田中宏二. 教師の職業ストレスサーに関する研究: 教師の職業ストレスサーとバーンアウトの関係を中心に. *教育心理学研究* 51: 165-174, 2003.
  16. 東京大学医学部心療内科 TEG研究会 編. 新版TEG: 解説とエゴグラム・パターン. 金子書房 2002.
  17. 東京大学医学部心療内科 TEG研究会 編. 新版TEG: 実施マニュアル. 金子書房 2002.

[2006年3月2日受付]